ダウラギリに無酸素で登頂し、世界8000メートル峰14座完登

竹内洋岳さんを迎え

「植村直己冒険賞」授賞式・記念講演会

『挑戦し続ける想い～8000m峰14座完登の軌跡～』

▲中貝市長（右）から盾と記念メダルを受け取る竹内さん

▲「植村直己冒険賞」特別賞が贈られた村口徳行さん（左）と渡邉玉枝さん（右）

６月15日、日高文化体育館で、2012「植村直己冒険賞」授賞式および記念講演会を開催しました。

「植村直己冒険賞」受賞者の竹内洋岳さん（42歳・東京都在住）は、昨年５月に14座目となるダウラギリに無酸素で登頂し、日本人で初めて世界8000メートル峰14座の完全登頂を果たしました。

当日、石毛直道選考委員の選考評に引き続き、中貝市長から盾とメダルの授与が行われました。

竹内さんは「世界でも類を見ないこの賞で、これからも冒険者の心意気を表彰し続けていただきたい」と感謝の言葉を述べました。同特別賞を受賞した村口徳行さん（57歳・静岡県在住）と渡邉玉枝さん（74歳・山梨県在住）にも盾が贈られ、村口さんは「これからも登山家がもたらす感動を撮影し、若い人たちに伝えていきたい」、渡邉さんは「登山は年をとっても楽しいスポーツ、これからも続けたい」と受賞の喜びを話しました。

また、竹内さんによる「挑戦し続ける想い ～8000m峰14座完登の軌跡～」と題した記念講演も行われました。約900人の観衆を前に、竹内さんは、デスゾーン（死の地帯）と呼ばれる8000メートルの世界や、死を覚悟した雪崩事故から奇跡の生還など、14座登頂の軌跡を数々のエピソードを交えながら話しました。そして、「この先、どこまで山を登り続けられるかを見届けてほしい」と締めくくりました。

授賞式終了後、植村直己さんの出身地区の、国府地区公民館に会場を移動し、植村直己冒険賞「受賞者を囲む会」が開催されました。地元有志や植村さんの同級生など約100人が心のこもった手料理で受賞者をもてなし、授賞式では聞くことができなかった話や植村直己さんの思い出話などで大いに盛り上がりました。

《問合せ》植村直己冒険館☎44-1515

▲選考委員の石毛直道さんは「竹内さんの14座完登は肉体的にも精神的にも強くないとできない。今回は受賞者全員がヒマラヤでの冒険ということで、全会一致で決まりました」と選考評を述べた

▲オープニングでは、府中小学校3年生の児童が植村直己さんをテーマに『未来へのとびらを開いて』と題し、歌などを披露

講演要旨

『挑戦し続ける想い ～8000m峰14座完登の軌跡～』

▲記念講演会で過酷な高所登山を振り返る竹内さん

■大雪崩から奇跡の生還

2006年、〔カンチェンジュンガ（8586m、8座目）の登頂成功後、〕私は「必ず14座を最後まで死なずに登り切る『覚悟』を込めて、プロ登山家になります」と宣言し、それからは14座を登るために8000メートル峰だけを集中的に登り始めました。

宣言をしてすぐにマナスル（8163m）に登り、続けて10座目のガッシャブルムⅡ峰（8035m）に向かいました。4人チームの先頭を登っていると、音でもなく振動でもなく、山全体が、「クッ」と沈むような感じがして、次の瞬間、バランスを崩して、雪崩に巻き込まれたと気付きました。空中を落ちていくような感覚の中で、「もうこれは助からない」と、非常に冷静に感じるとともに、自分の想像が及ばなくて雪崩に巻き込まれてしまったことに、凄まじい怒りが湧き上がってきました。

体が止まったとき、目の前は真っ暗で、体はどこも動きませんでした。いよいよ息ができなくなり「あー、ここまでか」と思ったそのとき、誰かが私を雪の中から引っ張り出してくれ、キャンプまで運んでくれました。スイス人の知り合いでした。そのとき凄まじい痛みで錯乱状態となり、「もういいから、助けないで捨ててってくれー」とわめき散らしました。

後で分かりましたが、背骨が1個潰れて、肋骨が5本折れて、肺が片方潰れる重傷を負っていたそうです。（現地では）ドクターから、私の命は明日まで持たない、と宣告されました。息をするのをやめたいくらい苦しい中、残量半分の酸素ボンベが届き、それを着けられ呼吸が少し楽になりました。しかし「これがなくなったらお前は死ぬ」と言われました。

ところが、1人のドイツ人が、夜、真っ暗な中を下のキャンプまで酸素ボンベを取りに行ってくれたのです。そのお陰で私は生き延びることができました。なぜ最初に届いた酸素ボンベが半分だったのかが分からなかった私は、翌日、テントの外に置かれた寝袋を見て全てを理解しました。チームメイトも雪崩に巻き込まれており、私よりも状態の悪かった彼を優先して酸素ボンベを使ったようです。彼が死んでしまったので、その酸素が私に回ってきたということです。

それまでは、「助けなくていい」「もういいから放っておいてくれ」とか言っていましたが、「絶対に生き延びてやる。そしてまたここに戻って来る」という思いに変わりました。

それから私は、2週間掛けて寝たまま日本まで送り届けられ、背骨にチタンシャフトを入れる手術を受けました。

■山でもらった新たな命

私にとって山登りというのは、自分の足で登って、自分の足で下りてくるものです。自分の足で下りてこないということは死ぬことです。ガッシャブルムⅡ峰の登山は、自分の足で下りてきてもいないのに、死んでもいない。これは私にとって絶対許しがたいことでした。そもそも命は助からない状況だったと思います。私は山で知り合った人たちに「助けられた」のではなく、「少しずつ新しい命を分けてもらった」ようなもの。だから、この命は全部山で使おうと決めました。

翌2008年、周りの人たちから強く制止されましたが、体にチタンシャフトを入れたままガッシャブルムⅡ峰に登り、引き続きブロードピーク（11座目）に登頂しました。

■8000メートル峰を完全登頂

そして昨年、14座目になるダウラギリに向かうわけです。途中、パートナーの中島ケンロウさんが高所順応できず下りてしまいましたが、中島さんは「必ず、迎えに来ます」と約束してくれました。この約束を信じて、本来であれば途中で引き返さないといけない時間になりながらも、登り続け、夕方の5時半に登頂しました。もちろんその日はビバーク（露営）しました。これは非常に非常に危険な行為です。中島さんの言葉がなければ、きっと登頂はできませんでした。ダウラギリの頂上は中島さんと分かち合った登山でしたし、いいチーム登山だったと思います。

14座を私一人で到達したように思われがちですが、今までに出会い、関わってくれた全ての方のおかげです。もし、そのうちの1人でも欠けていたら、きっとこの14座は登れなかったでしょう。

私は、これまで登りたい山に登り、到達すると次の目標を見つけ、登る、それをひたすら続けてきました。14座は確かに自分が掲げた大きな目標でしたが、そこが最終ではなく、今までと同じように次の目標を見つけて、そしてその山に向かっていきます。